1999-6
1999-16

『怖いもんなし23人の喋るぞ！』 pp.187-202
旺文社 1999.4.20発行

社会のリアリティを丸ごと背負え
橋爪 大三郎

はしづめ・だいさぶろう
社会学者
1948年、神奈川県鎌倉市生まれ。私立・開成高校出身。東京大学文学部社会学科卒、同大大学院社会学研究科博士課程修了。1989年より東京工業大学工学部助教授、教授を経て、1996年、東京工業大学社会理工学研究科価値システム専攻・教授に。初心者にもわかりやすい平易な文体で、現代社会の動きや構造主義などを説いてみせる社会学者。著書は『橋爪大三郎の社会学講義1～3』(夏目書房)『大問題！』(幻冬舎)『橋爪大三郎コレクションⅠ～Ⅲ』(剄草書房)『言語ゲームと社会理論』(剄草書房)など多数。

「説明する」ことと「理解する」こと

「サイエンス」は自然科学と訳されていますが、人文科学も社会科学も「サイエンス」であることには変わりないんです。「サイエンス」というのは、ものごとを説明するための方法です。ものごとが単純で具体的であればあるほど説明はしやすいわけですが、そういうものとはかなり異質の存在として、人間というものがある。

人間というのは「説明する」というよりも「理解する」対象です。理解するとはどういうことかと言うと、私も人間だし、相手も人間である、だから結局こういうことではありませんか、とお互い納得する活動なんです。「説明する」という時は、相手は自分とは違う存在であっても構わない。だから、相手はモノであってもいいわけです。「理解する」というのは、結局自分を理解するということであり、相手が自分と同じ存在（＝人間）であることを確認することなのです。

社会科学というのは、理解の要素を織り込まなければならないんです。人間が動いているということは、分子や原子が動いているわけではなく、お互いに理解しつつ、自分と他者との関係を調整していくことなのです。科学であろうとするから説明する、すなわち「サイエンス」なのですが、そこに理解という要素がなくてはならない。理解というものを保証する枠組みとして、言語がなければならない。言語を説明の枠組みの中に織り込んでいることが、社会科学にとってもっとも根本的なことだと、私は思うんです。

おまけ『ファム・ポリティク』通巻223号 p.19 政策を提言する女性の会
1999.3.25 発行

本紹介

「選択・責任・連帯の教育改革」岩波ブクレット No.471
堤清二・橋爪大三郎

社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」の内容のほとんどと、堤清二・橋爪大三郎両氏の対談を集録したもの。報告書起草の精神的背景を知るために最適のブックレットとして、「選択・責任・連帯の教育改革」の原文を手に入れたい方におすすめしたい。

対談の中で橋爪氏は、「現在の学校は監獄にそっくりです」と指摘、校長も教員も生徒も、いつも自分からは見えない誰かに見られているのではとおびえている。それは入学試験だったり、文部省の通達や指導要領だったり。改革案は「自分がもう一度学校に行くのであれば、こんな学校だったら行きたい」と思えるものをつくったと語る。

両氏の提言する改革の基本姿勢と目的は「学校の機能回復、教育機能の回復」であるが、それが実現したらどんなにすばらしいだろうと思わずにはいられない一冊である。

1999-16

■画家とモデルのダイアローグ
東京・大岡山の大学にて

画家　生真面目な性格ですね。
モデル　それはよくわからないな。
画家　学者は個性があるとまずいんですか。
モデル　それもよくわからないな。でも、学者は真実に奉仕しているわけだから個性なんて邪魔だよね。
画家　でも一方では、強烈な個性だけが真実の襞に触れられるのかもしれませんよ。

世界を探索行動する社会学

私の専門の社会学とは、簡単に言うと、テキサスヒット狙いの隙間産業なんです。ですから、政治学や経済学がちゃんとしている時には、割に出番がないんですよ。ところが今は、経済制度も法律や行政制度もうまくいかない。そこで、機構改革や構造改革をしようという話になっています。

政治学や法律学、経済学という学問は、制度を所与のものと考えて、制度の中で一番良い解決策は何か、ということを見つけようとする、そういう発想が強すぎるんです。そこで、制度を変えようという話になると、途端に発言ができなくなってしまう。政治学や経済学はその点が弱かった。そこで、いろいろな制度をもっと無手勝流に扱う社会学にお鉢がまわってきたのではないか、と考えられます。ですから、社会学が元気がいいという状況は、相対的なもので社会学の実力に依っているわけではない。

社会学はいわば「個人芸」で、確立された枠組みというのはないんですね。「皆さん、この枠組みに従って考えましょう」とどれかひとつに限定しても、生産性が上がらない。そこで、社会学者は「探索行動型」になる。たとえばアリは、エサがあると、一直線にそこまで進んでいって、たかって、すぐに持って帰りますよね。エサがない時にはどうするかと言うと、みんな同じ方向に行かず、バラバラに歩きまわる。そこで、たまたまだれかがエサを見つけると、みんなに信号を送る。ここまでは「探索行動型」ですが、その後は「一斉行動型」になる。

社会学は学問の歴史が浅いし、制度化の度合いも緩いから、「探索行動型」、すなわち「個人芸」になる。そこで、個人芸で見つけてきたおもしろい話なりテーマなりが取り上げられていく。「制度型」の学問では、個人の才能や芸は目立ちません。政治学や経済学にも、才能のある人はたくさんいるのだと思いますが、制度と同調していないかぎり、また、その最先端に立たないかぎりは目立たない。最先端に立つことは大変なことで、アメリカの経済学の最先端に立つということは、ノーベル経済学賞をもらえるということですよ。そこまで行ける人はなかなかいない。

ちょっと脇道に逸れますが、デリバティブ（金融派生商品）の研究でノーベル賞を受賞した経済学者が、自分でもデリバティブを実践してひと財産を築いたということがありました。

デリバティブを含めた投機というのは、プレーヤーが参加することによって現象が変わってしまうゲームです。競馬もそうですね。オッズは掛け金によって大きく違ってきます。そういう理論を研究していたら、いつかはそれに飽きたらずに必ずやりたくなるでしょうね。これに対して、たとえば浅田彰さんが昔やっていた「一般均衡理論」は、みんながプレーヤーになっているところで、冷静に観察している人がいてもいいし、事実、冷静な観察者を必要とする学問なんです。言い換えると、プレーヤーが参入しようが退出しようが影響がないという学問なんです。でもデリバティブはそうではない。みんなが冷静に観察している結果、社会がこれだけまずくなってしまったこの時代に、「俺がプレーヤーになる」と言う人は貴重ですよ。それを邪魔してほしくはないですね。

「言語社会学」の構想へ

社会学はテキサスヒット狙いと言いましたが、さまざまな学問の守備範囲の中間に位置しています。「制服少女」を守備範囲にしている学者がいれば、それは彼にまかせておいて、ほかの学者はだれも守っていないフィールドで待ちかまえているわけです。だけど私はテキサスヒットではなく、球場全体を守備範囲に入れたい。

それが、私自身が構想し、かねてから主張している「言語派社会学」です。人間関係を構成する非常に基本的な要素として、人間同士の関係を記述しなければ学問として成立しないはずですが、これまでの社会学は、残念ながらそれを記述できていない。なぜかというと、人間というものをよく理解できていないし、人間と人間がどういうふうに関係をつくっていくのかということを押さえていないからです。なぜ押さえていないかというと、言語をよく理解していないからなんです。

マルクス主義を勉強していて非常に不満に思ったことは、すべてを「上部構造」と「下部構造」にわけているのですが、マルクス・レーニン主義研究所の哲学の教科書を見ても、言語は「上部構造」にあたるのか「下部構造」にあたるのかがアイマイでした。

日本では、吉本隆明さんと三浦つとむさんが、マルクス主義者でありながら言語について詳しい研究をしていました。彼らの著作を学生のころから読んできましたが、日本のマルクス主義者の仕事はおよそあてにならないけれど、彼らの仕事は信頼に足る。英米系の言語哲学や社会学などもあまりあてにはならない、じゃあ、自分でやるしかないと。

「言語派社会学」は一八～一九歳のころから考えていたことですが、「言語派社会学」の構想にヒントを与えた思想の一つに「構造主義」があります。

構造主義との出会い

私は以前はマルクス主義者で、一七歳のころから二一、二二歳のころまでは、かなり強くマルクス主義の影響を受けていました。でも、そのうちマルクス主義はおかしいぞ、正しいはずの全共闘運動が負けるとはどういうことだ、マルクスが間違っている可能性があるのではないか、と考えるようになった。

当時は、レヴィ＝ストロースという学者が気になり始めていました。でも、フランス語はできないし、翻訳もない。そうこうしているうちに、レヴィ＝ストロースの『構造人類学』（みすず書房）という本の英語版に出会ったのです。早速買ってきて、読んでみたところおもしろくて。どこがおもしろいかというと、マルクス主義とは全然違う発想から書かれているんですね。

当時はマルクス主義でない発想というのは市民派だったり、戦後民主主義だったりした。そういう思想は、だいたいマルクス主義にからめ取られたり、揚げ足を取ったりしている程度に過ぎなかった。ところが構造主義というのはマルクス主義を通り抜けたあとのエッセンスみたいなものだから、マルクス

主義の枠組みで理解しようと思っても無理なんです。そこに開放感があって、それでのめり込んでいきました。レヴィ＝ストロースは、経済制度や政治制度が全然存在していない状態の社会について、まず考えていました。だから、私にとっても、未開社会やサルの社会は学問的原点を与えるようにみえました。

構造主義を超えて

構造主義は人間の精神活動に注目して、マルクス主義にとらわれずに研究をすすめるという点では大変に結構なんです。構造主義は、たとえて言えば、結晶――水晶とか氷砂糖とか――を扱うのには優れている。人間の精神が純粋な形で、親族になったり、神話になったりというように、理想的にある秩序をつくってしまって、それが百年でも千年でも続いていくという場合には、構造主義の説明は有効なんです。

しかし、現代社会は経済と政治が絡まったり、文化が技術と絡み合って変容したり、ダイナミックに変化する。そういう「応用問題」を解くのには、構造主義は役に立たない。となると、既存の政治学とか経済学などの学問の枠組みを利用したほうが、はるかに生産性が高い。構造主義の方法では、株式市場の動きを分析しようとしても、それは無理です。冷戦が終結するということに関しても、構造主義の方法論に頼っていては、その認識がいくらレベルの高いものだとしても、大したことが言えないんですよ。

そうすると、先ほど言ったような既存の学問を使わなければならない。だけど、それらの学問の根底

文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースの著作『野生の思考』と『悲しき熱帯』。
流麗な文体で綴られた著作群は構造主義のバイブルとして、全世界で一大ブームを起こした。
構造主義は60年代後半に日本に上陸。

にある人間観に、私は不信があったんです。だから、それをつくり替えなければならないし、つくり替えるには、誤差を修正しないといけない。たとえば、ある鉄砲には、右へ曲がる「くせ」がある。でも、その鉄砲を使わないで自分ではじめから鉄砲をつくるのは時間のロスである。だから、右へ曲がるのを想定してあらかじめ左寄りに構える。つまり、道具の誤差というのを理解して使わなければいけない。すべての学問にはそういう「くせ」があり、そういう意味では正しくないわけです。だけど、使い道はある。その点を自覚して学問を進めていく必要があります。

常識との距離感を磨け

世の中の「常識」と、「自分の考え」とが両方ある場合は、自分の考えに従ったほうがいいと思う。常識は変わる。常識はしばしば誤る。常識はしばしば自分に不利益を与えたり、役に立たなかったりする。大事なことは、常識に対して異和感があれば、自分の考えを優先させる、ということ。自分で責任が取れるんだから。

たとえば、いい大学に入るとあとの人生がスムーズに行くとか、そうでない大学に入るとその反対などということが「常識として」言われていますが、大した根拠がない。しかし、常識にやみくもに反対すればいいというのではないので、そこは取り違えないように。

常識に反対するというのは実に単純な発想で楽なんですが、それだけでは逆に、常識におんぶしていることになる。たとえば、みんながネクタイをしているから自分はネクタイを締めないとか、周囲が刈り上げにしているから自分は髪を後ろで結ぶとか、若い人は必ずやる――私もそうでした――けれども、そういう行為は、常識との距離が取れていない証拠です。「常識にとらわれない」ということは実は難しい。自分の考えがなければいけませんから。そのためにも自分の言葉で自分の考えを表現する術を体得していかなければなりません。

新しい規範を確立しよう

私は現在の世の中のアノミー（無秩序）な状況に対して、「新たな規範の確立」の必要性を説いていますが、たとえば宮台真司さんなんかは「規範や倫理はクソクラエ」とおっしゃっていますね。宮台さんの言い方は、一種の逆説、アイロニーなんです。現状に対する異議申し立て的言説ですから、政治的であるし、駆け引きがあります。宮台さんが本当はどう考えているのかは、いちどじっくり聞いてみないとわからない。

駆け引きをすると、駆け引きしている相手にも引きずられる。私はなるべくそういう駆け引きをしない地点にいようと思っています。そうすると、時代やさまざまな事柄に動かされない、不変の人間関係の基礎は何か、ということが重要になってきますが、私はそれは言語だと思うんです。人間にとって一番幸せなことは、自分にとって望ましい人間関係や社会をつくり上げる能力、すなわち、言語を十分に

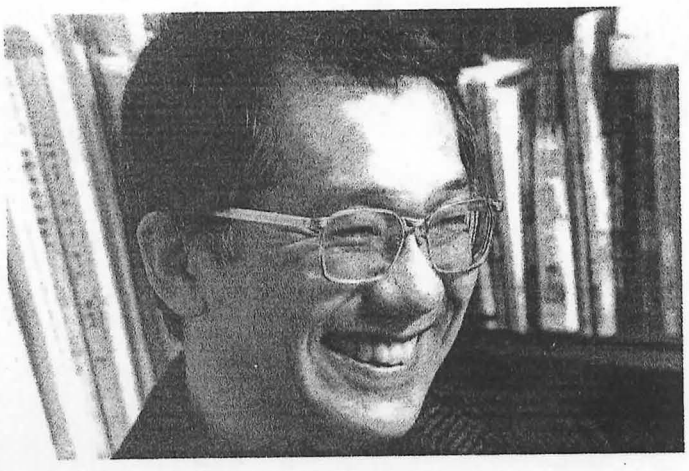
使いこなす能力に恵まれていることだと思います。そういう能力を高めていくということが、一番重要じゃないのかな。

「規範」というのは、自分と言語との折り合いが良い、ということだと思います。「規範」とはこういうことをすべきだとか、自分のことをうまく説明できるとか、自分の希望、自分の信じる正しさ、そういうことをきちんと言葉で的確に伝えていく能力がある状態である、とも言える。こういうことを言うと「合理主義者だ」などと批判されてしまいますが、言語の効能を認めない動きとどう格闘していくかが規範の課題となる。

言語以外の現象というのは必ずあって、そこは混沌としていて割り切れないし、グシャグシャな状態なんです。その状態に言語という道具でもって、何とか秩序を与えようとする、そのダイナミズムの中で、人間は考えていくし、生きていくし、社会もつくっていく。そこで、言語のあるべき位置というものを、常に再発見していくということが、時代時代のやり方ではないか、と思います。

社会のリアリティを丸ごと背負え

言語というものは、現在なら教育とかマスメディアなどの機能によって、複製され流布されて、いつも外から自分のところに届くようになっている。自分の内側からわき出てくる言葉がないという状況が「無規範」ということだと思います。



「外から与えられる言葉はまっぴらだ」という言い方はよくわかります。でも、それだけを言っていたのでは何も始まりません。かといって、ただ座っていれば「内から言葉が湧き上がってくる」かというと、そんなに簡単にはいかない。少なくとも目指すべき方向ということでいえば、外から与えられる言葉をただ拒否していればいい、という段階ではないと思います。

たとえば、たびたび登場していただいて恐縮ですが、宮台さんの言われるように、「茶髪でルーズソックスの女子高生が社会のリアリティを支えている」という面は否定できません。そこをよく理解しているのは結構だけれども、もう一方では、蔑まれているただのオジサン・オバサン連中もまた、社会のリアリティを背負っている。彼（女）らのこともよく理解して、その両方を背負わなければまずいのではないか、と思います。片方がダメで、片方が時代に適合している、などということは言えないのではないか、というのが、私の直感です。

大学投資でジリ貧からの脱出を

私が研究のベースとしている大学も岐路に差しかかっています。蓮實重彦さんが東大総長になられた時、あらゆる手段を使ってならないように努力したけれどもなってしまった、と書いていましたね。大学を改革しようと思ったら学長になっても大したことはできません。私だったらそんな遠まわりな方法は取りません。

大学の教員はたいがい、こういうことを言ったら学部長はどう言うだろうか→学長はどう言うだろうか→文部省の担当官や係長・課長はどう言うだろうか→大蔵省の担当官はどう言うだろうか、というふうに上を見ているんです。みんなヒラメですからね。ですから、何かを改革しようとすると、必ず横槍が入ってしまい、だいたい失敗する。

それよりも、おおもとが変わればいっぺんに変わってしまう。おおもととは、国会のことです。今は景気が悪いですね。景気が悪ければ、景気のいいことを言わなければならない。景気を良くしようと思ったら、大学に予算をどんどんつけるべきです。年間二兆円くらい。それから、全国の大学をハイテク化する。昔ながらの公共事業でトンネルや橋をつくったりするよりも、大学でコンピュータをどっさり買えば、大学はハイテク波及効果が高いところですから、次の時代の投資効率としては効果的なんです。そういうムードづくりが大切です。

アメリカがそういうやり方で大成功している以上、アメリカの大学システムを見習わなければなりません。日本のは「ジリ貧システム」です。私の主張している大学改革論は、アメリカ型をもっと見習おう、というものです。教育・研究のために必要なことはどんどんやり、必要のないことはやらなくていい、というのが骨子です。詳しくは言えませんが、学生の定員があること、落第させることもままならないことなどが、大学改革の足枷になっているんです（注1）。

だけど、アメリカと同じモデルをざっくり輸入することはできないから、英語を使った講義を半分ぐらいに増やすとしても、日本語も使うとか、ローカルな点も残しながら、大学を変えていきたいと考えています。

注1　財団法人・社会経済生産性本部は、一九九七年秋以来、社会政策特別委員会（堤清二委員長）のもとで抜本的な教育改革について審議を重ね、一九九八年七月「選択・責任・連帯の教育改革（中間報告）」を発表した。橋爪は、同専門委員会委員長として、中間報告案のとりまとめに携わった。